「セックスボランティア」の言葉を聞いて

ある若者から、以下のメール。

【　最近「セックスボランティア」を読みました。母が介護系の仕事をしていることもあり、偶然にも母が既読しており、私にも勧めてきたという次第でその本と出会いました。

読み終えて、なんだか、複雑な心境です。ひとことでは語れないものですね。障害を持つ方の性…。

でも、そのようなことを取材しょうとした筆者の挑戦の心には共感できるような気もするような、しないような。。。気がします。今まで考えたこともなかったようなことが書かれておりました。この複雑な心境を誰かに話したくてメイルしました。　】

障害者の性に関することは、最近では、２００４／１０／６付の朝日新聞「人」欄に、この問題に取り組む NPO 活動を立ち上げた CP の青年が紹介されていたように、マスコミ等でも見聞する機会が増えてきたように思う。

もう２０年程前に、ある講演会で北欧では自慰行為への介助も、介助業務に位置づけられている話を聞いたことがある。日本も、いよいよこうした論議が始まる時代に入ったのかなあと感じている。障害があるというのは、その人の属性の一つに過ぎず、障害者の性の問題を疎外視するのは、当然おかしいこと。それだけに、こうした問題が表にでてくることは必然性のあることとも思う。

ただ、実情を知らずしてあれこれコメントできないが、何も性に関して悩んでいるのは、障害者に限らない話。高齢者の性の問題も、最近マスコミで取り上げられてきている。この問題を社会として認知・了解するまでには、色んな事例を知ることからの議論と、残念ながら時間がかかることのようには思う。

一方、ボランティア活動とは、あくまで主体性を重んじることであり、単に「頼まれたから援助する」では、ボランティア活動ではなく、単なるお手伝い。あまりにも、ボランティアという言葉が、今の社会では安易に使われ過ぎているのでないかとも思う。「セックスボランティア」という言葉だけで性の援助はするものでなく、あくまでお互いの個人同士の係わり合いの中で、お互いの主体性の人間関係の中で考え了解し合うことでないかと思う。

こうした趣旨のことを、取り敢えずこの若者に返信した。

皆さんは、この問題をどのようにお考えですか？ご意見をお聞かせください。

（2004 年 11 月 01 日　記）